

3. きらめく動物たちの命と海 【久保田信の白浜だより(その8)】

漂着昆虫と海浜性昆虫

漂着した色々な昆虫類

2011年5月末に、早々と台風2号が紀伊半島沿岸に影響を与えた。熱帯系のサツマギブリのように台風の影響で過去に漂着した昆虫類には、大きなオニヤンマの仲間が1個体、2004年8月28日に満潮線に横たわっていた。アカトンボ類は時々漂着するが、この類は初めてだった。しかし、普通種のオニヤンマで、体長10cmほどもあり、日本のトンボ類では最大種である。日本全国にいるが、南西諸島には南方系の4種の近縁種（カラスヤンマ、ミナミヤンマ、オキナワミナミヤンマ、タイワンヤンマ）が分布する。生きている時は、いずれも澄みきった緑の大きな目を持ち、小さな虫を捕まえて食べている。この緑の複眼は、1万個の小さな目が集合したもので、上半分は遠くを、下半分は近くを見るときという遠近両用のすぐれものだ。

オニヤンマは、産卵も独特のやり方をする。雌が単独で、流れの緩やかな浅瀬に体を

垂直に立て、長い産卵管を砂泥中に突き刺して産む。長い場合、10 分もかけて飛び上がったり、降りたりの上下運動を繰り返す。他には、河川の中流にいるコオニヤンマのヤゴ（乾風 登氏同定）をはじめ、アゲハチョウやクマゼミ、背中に紋のあるアトモンアオゴミムシ（和歌山県立自然博物館の的場 績氏同定）などが流れ着いた。

北浜”に、稀だが、アケビコノハの翅だけが打ち上がることもある。一度に複数個体の翅が漂着した記録がある。2 個体は表側が枯葉にそっくりな前翅で、残りの 1 個体は独特の斑紋をもった後翅で、“北浜”の船着場脇の砂の上に 2008 年 11 月 26 日の午後に打ち上がっていた（図）。それらは、風波によって 1 箇所を集められていた。その前後の日にはアケビコノハの打ち上げは見られなかった。しかし、既に同年 11 月 15 日に 1 個体の後翅が“北浜”で打ち上がっていた。この 11 月には上記の 4 日の他に 7, 10, 12, 28, 29 日にも調査したが、それら 5 日間にアケビコノハの漂着は見られなかった（久保田, 2009）。

アケビコノハは果実を吸汁するヤガ科の一種で、さまざまな果樹の実る季節に多く発生する。しかし、実験所構内およびその付近で本種の成体や幼虫を目撃したことはない。今回のように他地域でも浜辺に翅が打ち上がる可能性があるのかは不明だが、当地域では、海岸への漂着が起きやすい何らかの要因があるものと推察される。

“北浜”でみかける昆虫類

海岸の満潮線付近には打ち上げ物がよくたまっている。そのような所で頻繁に見かけるのが、甲虫のゴミムシダマシ類で、筆者が調査している漂着物と密接な関係にある。海産動物の乾燥した死骸などを食べており、いわば“海岸の掃除屋”である。北浜では、ハサミムシやウミベアカバネハネカクシなども見かけるが、それらより動きがのろいのがニセハマヒョウタンゴミムシダマシだ。この甲虫は人の気配を感じると砂に潜って逃げてしまう。だが、潜っても深くは潜行しないので、居場所がすぐ分かり、容易に採集できる。北浜では、2000 年に初めてこの甲虫の存在に気がついて以来、毎年、きまって見かける。このような観察は、南紀生物同好会の「くろしお」誌 22 号に、的場績氏と一緒に報告した（久保田・的場, 2003）。

ゴミムシダマシ科は、甲虫類の中では形態が最も変化に富んでいる分類群であるが、色彩は地味で黒色や黒褐色の単一色のものが大半である。ちなみに、この科の名称は、「黒い虫」という意味。和名はゴミムシ科とよく似たものが多いことによる。海岸の砂浜で生活するこの仲間には、他には、ホネゴミムシダマシやホソハマゴミムシダマシなどが知られている。ウミアメンボ類のように海中にこそ進出していないものの、海辺に進出した虫



として、海浜には、ハンミョウ類、オサムシ類、ゾウムシ類、シデムシ類などに海浜性の種がいくつか知られている。

図. 和歌山県白浜町の
京都大学瀬戸臨海実験所
“北浜” に漂着したアケ
ビ科の翅